

『地域包括ケア病床でのリハビリの役割』

～第1報 “その人らしい在宅復帰” を目指して～

社会医療法人社団沼南会 沼隈病院

理学療法士 ○喜多村浩樹/言語聴覚士 山岡絵梨/作業療法士 赤松利成

【Key-word】 地域包括ケア病床 リハビリ 役割

1. 【はじめに】

当法人では、地域包括ケア病床は現在（H28年1月時点）12床を有している。専従PTの役割は、リハビリ病床平均2単位提供と60日以内の在宅復帰に向け、リハビリ視点を生かしたフィールドワーク（情報収集および患者・家族との問題意識の共有化）が必要と考えている。その活動に若干の知見を加え報告する。

2. 【Case概要】

Case1：70歳代男性・主要疾患：DM・BI：75点・家族同居・認知症：軽度

Case2：90歳代女性・主要疾患：イレウス ope 後・BI：65点・独居・認知症：軽度

2ケース共に目標はADL能力向上・在宅復帰

3. 【在宅復帰への問題点】

Case1ではADL能力低下と共に医学的管理の在宅場面での継続方法と退院後生活のイメージが不明確であった。Case2では離床が促進されず、一人暮らしへの不安をベースにリハビリ・治療への拒否が目立っていた。

4. 【フィールドワーク内容】

専従PTは、Case1では、Dr・PH・Ns等へ状況を伝え在宅での疾病管理を多職種で検討し実施した。Case2では社会的背景を情報集約し拒否への問題点を明確にして、病床スタッフ・近所親戚へもリハビリに参加してもらいながら離床を促進した。

4. 【結果】

在宅復帰達成

5. 【考察】

今回のCaseに限らず、社会的背景情報不足、医療職側と患者側で在宅復帰後イメージの相違が問題点となる事がよくある。その中でリハビリ専門職の疾病・ADL・社会的背景を含め目標立案する思考能力を活用したフィールドワークが結果へつながる一つの要因であったと考えている。

6. 【今後について】

今後、このようなフィールドワークが専従PTと多職種で法人のスケールメリットを活かし組織化された形で実施できるように取り組み、“その人らしい在宅復帰”を目指していきたい。



社会医療法人社団沼南会

沼隈病院

『地域包括ケア病床でのリハビリの役割』 ～第1報“その人らしい在宅復帰”を目指して

○喜多村浩樹1) 山岡絵梨2)

- 1) 社会医療法人社団沼南会 沼隈病院リハビリテーション部
- 2) 同上

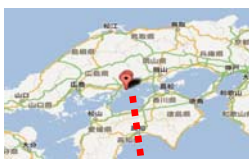
理学療法士
言語聴覚士

沼南会

Shounankai Numakuma Hospital Fukuyama-Hiroshima Japan 2016



はじめに・沼隈病院 概要



沼隈病院 理念

私たちは急性期医療から
在宅医療までのトータルケアで、
地域のみなさまの
健康と安全な生活を支援します。



【地域の背景】

沼隈周辺地域
人口 約1万7千人弱
沼隈周辺高齢化率
(65歳以上)
約31%



一般病棟	48床
一般病床	48床
地域包括ケア病床	12床
療養病床	58床

広島県福山市沼隈町中山南469-3
TEL(084)-988-1888 Fax(084)-988-1119
<http://shounankai.or.jp/>



当法人は、全118床(一般病床・療養病床)であり、その中で、平成26年4月より、地域包括ケア病床・(12床)を有している。
【地域包括ケア病床でのPTの役割】

→リハビリ病床平均2単位提供と60日以内の在宅復帰

→フィールドワーク(情報収集および患者・家族・スタッフ との問題意識の共有化)

今回は2症例を通して在宅復帰へのフィールドワークを中心に取り組みを報告する。

Shounankai Numakuma Hospital Fukuyama-Hiroshima Japan 2016





Case 1 紹介

Case 1 : **70歳代男性** 糖尿病

要介護 3

BI : 75点

家族同居

認知症 : 軽度

医師からの指示→☆糖尿病への運動療法

☆在宅に向けた血糖コントロールトレーニング



在宅復帰への問題点

Case 1 : **70歳代男性** 糖尿病

- 血糖コントロールの在宅場面に合わせた調整
- 歩行、トイレ動作の能力低下





フィールドワーク

Case 1 : 70歳代男性 糖尿病

希望に沿ったコントロールは可能だと思います

■血糖コントロールの在宅場面に合わせた調整
→**医師と薬剤師が在宅に向けて調整**

■歩行、トイレ動作の能力低下
→**看護師と理学療法士が連携して活動量向上**



ケアカンファレンスの実施後 → ショートステイを経由しての自宅退院



Case 2 紹介

Case 2 : 90歳代女性 イレウスope後

要支援 1

BI : 65点

独居

認知症 : 軽度





在宅復帰への問題点

Case 2 : 90歳代女性 イレウスope後

•環境の変化や独居への不安をベースにリハビリ・治療への拒否から活動性低下

☆ケアマネージャーとの在宅生活の事前打合せ☆



フィールドワーク

Case 2 : 90歳代女性 イレウスope後

•環境の変化や独居への不安をベースにリハビリ・治療への拒否から活動性低下



地域のケアマネージャーへの「協力依頼」

「あんたがいるなら安心じゃ」



拒否もなくなりCM・病棟スタッフもリハビリに参加してもらいながら離床を促進





考察

今回のケースでは、地域包括ケア病床で、理学療法士の強みを生かしたフィールドワークが実践された点が効果的であった。



理学療法士の強み

疾病・身体的動作能力・社会的背景を統合し
予後予測ができる点

医療法人
尚南会



おわりに

地域包括ケア病床において

- 個別リハビリ+フィールドワークの重要性
- リハビリ専門職の強みを生かしたフレームワーク創りをめざすこと



“その人らしい”在宅生活へ

医療法人
尚南会





ご静聴ありがとうございました。

